



情報科学芸術大学院大学附属図書館

vol. **11**

2019.1

# IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



ビットマン©1998 明和電機/クワクポリョウタ

## 特集 メディアアート **クワクポリョウタ**

→自作を語る／思い出の一冊／学生に薦める一冊

- 図書館を活用する
- 「今週の一冊」二百冊をむかえて

この特集では、IAMASの教員に、自著・思い出の一冊・お薦めの本などを紹介してもらいます。第11回は、クワクボリョウタ准教授です。

## →自作を語る

自分が今までもっとも丹念に書き上げた「テキスト」は1998年に作った作品「ビットマン」（表紙参照）のプログラムかも知れません。

1024ワードの中にマトリクスLEDのダイナミックスキャンと、シーケンスの制御、アニメーションのビットマップと英字フォントの全てをアセンブラでコーディングする必要がありました。限られた空間なので、当時はレジスタの隅々まで挙動を把握していましたが、表示に影響がでないように、一周クロックもずれのない時計仕掛けのようなコーディングをしなければなりません。目視で二モニックを追ってロジックを確認し、EEPROMに書き込んでリセットすると1秒あたり100万命令のオーダーで実行されるわけです。実際には人の認識の限界を超えたスピードで読み上げられ実行されているのに挙動としては人の眼を楽しませる程度に現象する、そのことに妙に感じ入っていました。

今パソコンでプログラムを動かしてもその感覚は蘇らないところを見ると、あの感覚はオートマタの部類が呼び起こす物だったのでしょうか。

## →思い出の一冊

### 植島啓司・伊藤俊治著『ディスコミュニケーション』

この本を書店で手にしたのは高校2年の頃だったと思います。帯に「あなたの言葉は伝わらない——メッセージに形を与えるのは背景のノイズなのに、ノイズを排除しないと正確なコミュニケーションは成立しないという絶対矛盾」という刺激的なコピーがあって中二病的な好奇心を鷲掴みにされたのをよく憶えています。

内容はおおまかに言うとテクノロジーの情報化・身体化・環境化が進む中で我々のコミュニケーションやリアリティがどう変化していくかということ巡る対談です。メディア・スーツやホロフォニクス、アイソレーション・タンクなど人間の知覚を探り変容させるメディア・テクノロジーの事例が散りばめられており、この本をインデックスとして様々な作品やトピックと巡り合うことが出来たと言う意味で、自分には大切な一冊です。

戸田ツトム氏による、DTP黎明期特有の、どこかハイパーテキストを匂わせるウィジェットやキーワードを随所に配置した造本構成も素晴らしいのです。冊子本体の他に32枚のカードが付いており、「非物質」「ブレインストーム」「シネクティクス」といったキーワード解説と、各キーワードの関連を示すマップで構成されています。マップというより迷路に近いのですが、読者はそれらを照らし組み合わせながらインタラクティブに本を読み進めるという趣向になっており、複数の要素を探索しながら各人のコンテキストを構成することが求められています。そういった点でやはりハイパーテキストを紙面で具現化する試みであったのだと思います。



リポレポート  
/1988年

## →学生に薦める一冊

### 濫澤龍彦著『快樂主義の哲学』

社会に適応し既製のレジャーで満足するような小市民的な幸福に異を唱え、人目を気にせず本能のおもむくまま本物の快樂を発見せよと指南する1965年に刊行された大衆向け教養書です。

少しページをめくって貰えばすぐに分かると思いますが、現実の社会通念に照らせば誠に不穏当な内容が目白押しでして、仮にこの内容を連ツイしたとなれば炎上は必至です。そういう意味でこの本は字義通り読んではいけません。全体を通して著者がどんな間合いで書いていたのか、50年以上を隔てた今、僕たちはこれをどのように受け止めれば良いのかくらいは考えながら読んでもらうことが大前提です。

それでも僕がこの本をお薦めしたいのは、日本の社会全体を覆う他人からの評価に気を取られるせせこましい態度や、ある種のケチ臭さをぶち壊すヒントが隠されていると考えるからです。特に第五章の快樂主義の奇人列伝は優れた作品を物した先人たちのエピソードをもとに、人間の快樂主義がいかなるダイナミックレンジを持ち得るかを識ることができます。



表紙は文春文庫版  
(初版：光文社・1965年)

## 図書館を活用する その5 使えるNDL

国立国会図書館を英語でNational Diet Libraryという。頭文字をとってNDLと略している。国立国会図書館は、文字通り国会の隣に東京本館があり、2002年には京都に関西館がオープンした。納本制度により、国内で発行されたすべての出版物が所蔵されている（はずの）図書館である。NDLは収集した出版物の利用のため、NDLに行かなくても必要な資料を入手できるよう資料のデジタル化やインターネットを通じたサービスに力を入れている。NDLのサービスについては、すでに「図書館便り」vol.9で国立国会図書館サーチ（NDLサーチ）を紹介した。NDLサーチでは、図書はもとより雑誌に掲載された記事・論文についても検索することができ、都道府県立図書館をはじめとする図書館の所蔵もあわせて検索結果に表示してくれる。

NDLサーチの検索結果に「国立国会図書館デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp/>)と表示されたら、該当の資料がデジタル化されていることを示している。もちろん、国立国会図書館デジタルコレクションのWebサイトからでも資料の検索は可能である。デジタル化した資料の公開範囲は、著作権などの権利関係により、国立国会図書館内限定、資料送信サービス参加館限定、インターネット公開の3つがある。IAMASの図書館でも館内のパソコンで一部閲覧ができる。

また、2018年1月にリニューアルしてサービスが始まった国立国会図書館オンライン (<https://ndlonline.ndl.go.jp/>) では、利用登録をすれば、雑誌記事や論文を複写して自宅などに郵送してくれる。探している論文のキーワードで検索し、検索結果から複写の申込ができ、1週間程度で発送される。

国立国会図書館を身近な図書館の一つに加え、NDLのさまざまなサービスを使ってほしい。



国立国会図書館デジタルコレクション



国立国会図書館オンライン

# 「今週の一冊」二百冊をむかえて

IAMASが領家町から加賀野・今宿に移転して、附属図書館も新しくなった。図書館機能のうちでも「地域など外部への発信」をその頃は急務としていたから、当時図書館長であったぼくは、とにかく図書館の蔵書を広く紹介しよう、そして利用していただこうと思いたち、赴任されたばかりの司書さんやゼミ生たちと「今週の一冊」という企画を立ち上げた。

基本的に図書館に収蔵されている書物、あるいはぜひ図書館に入れてほしい書物、それらのうち一冊を15分間で紹介するという内容だ。最初はぼくが目隠しをしてランダムに書架から選んだ一冊を、と考えたが、マニュアルやプログラム関係の蔵書の多いIAMAS図書館ではそれは困難だった。15分の砂時計も購入し、2014年5月15日に第一冊目の『舟を編む』がとりあげられた。

雨来、砂時計は三代目となり、Ustreamによる配信が始まりいまはYoutubeでの配信となった。外部から来てくれた方が常連さんとなっているのが何よりもありがたいが、卒業生や元職員などIAMAS関係者が足を運んでくれるのもかづけられる。松岡正剛の「千夜千冊」にはとうてい及ぶべくもないが、できるだけ休むことなく毎週肅々と「一冊」を紹介しつづけた。二百冊目は10月に上梓された拙著『伝統芸能ことはじめ』、じつはこの書物を二百冊目にしようと思ったとき、まだ本書は刊行されていなかった。危うく「今週の未完の一冊」となるところだった。

ところで「一冊」のためには毎回講義1コマ分くらいの詳細なノトを作っている。これはぼくにとっての読書ノトであり、講義のためのネタ帳であり、さらには「もうひとつの図書館」なのである。人はみな自身の脳の中に図書館をもっている。それぞれの図書館に新たな一冊を仲間入りさせていただきたい。一冊の書物からは百冊の書物の世界が枝分かれしている、そんな書物の森に彷徨い、書物の海に溺れる。「今週の一冊」は、このようにきわめて自然主義的なこころみのひとつなのである。(小林昌廣教授・前図書館長)

- 「今週の一冊」は、毎週木曜日、18時30分からIAMAS附属図書館にて開催しています。



■開館時間 月～木 10:15～19:00 / 金 11:15～20:00

■休館日 土曜日・日曜日・祝日、年末年始、臨時休館日(蔵書点検など)

## ■貸出

学生 20冊・3週間以内

卒業生 5冊(図書のみ)・2週間以内

学外者 2冊(図書のみ)・2週間以内

## <学外の方の利用資格>

- ・岐阜県在住・在勤の高校生以上の方
  - ・東海地区大学図書館協議会加盟大学の学生
- ※自習目的のご利用はお断りいたします。



情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 附属図書館 編集・発行

〒503-0807 岐阜県大垣市今宿6丁目52番地18 ワークショップ24 1F

TEL・FAX: 0584-75-6803 URL: <https://www.iamas.ac.jp/lib/>